

きょうじん

強靱な信仰と精神を持つ司祭 大坂の殉教者・ディオゴ結城了雪

取材協力
レンゾ・デ・ルカ神父
(イエズス会)



ディオゴ結城には、信仰と精神の強さがよく見えてきます。たとえ一人になっても宣教し、人には迷惑をかけない勇氣は、今日の光とも言えます。

ディオゴは1574年、四国の阿波国(現、徳島県)の徳島に生まれます。祖父は足利將軍の弟にあたり、身分の高い家系でした。少年ディオゴは、高槻のセミナリオに入学します。1587年には禁教令のため、有馬の八良尾にあるセミナリオに逃れ、1595年、天草でイエズス会のセミナリオに入り、天草・河内浦のコレジオで学び、1601年から3年間、ジュリアン中浦とともにマカオに留学します。ラテン語の手紙が2通残っていますが、非常にきれいなラテン語です。ラテン語を自由に、またきれいに書ける人で、高い教養を身につけ、目上に対しても、迫害者に対しても礼儀正しい人でした。

彼がマカオで生活している時、宣教師たちの間で意見が分かれてしまっています。迫害が厳しくなった日本の状況において、外国人の宣教師を再度日本へ派遣するか否か、また成績が優秀な神学生をマカオに温存して教育するか否か。ディオゴは教育者でしたので、マカオでの分裂、またマカオで十分な神学生の養成ができないことを考慮して、神学生をマカオからマニラへ移し、マニラで日本人学校みたいな養成所を設立し

てほしいとローマの総長に頼んでいます。彼は長上に何を頼んだらよいか、自分はどういう立場に置かれているかをよくわきまえていました。ただ長上から言われたことを実行するのではなく、日本人の立場として言わなければならないことをはっきりと述べていました。

マカオに司教がいなくてもあり、フランシスコ会のチンジョン神父とイエズス会の管区長だったカリワリオ神父の間に、司教総代理をめぐって衝突が生じ、教区内でもめてしまいます。このもめことは「日本人神学生の養成の問題」に拡大し、マカオで反日感情が強まっています。実際に問題を起したのは二つの修道会のメンバーでしたが…。1601年、1602年に日本人の司祭が誕生しますが、それ以後、マカオでは10年、20年経っても日本人は司祭に叙階してもらえない事態になります。カリワリオ神父の時代には、司祭叙階には40歳を超えていること、この程度の勉強をしなればと条件がつき、いくら勉強しても日本人は司祭にしてみらえませんでした。今で言えば差別的な環境でした。ディオゴはそのことを見抜き、日本では司祭叙階ができないこと、さらにマカオは分裂している状況から、マニラで学ぶことができるようにと願い出しました。日本語で勉強させれば、日本に戻った時にすぐに宣教活動がしやすいと建設的な提案を出しました。

高槻城跡



結城了雪



天草・河内浦（河浦）町案内図



1607年、伏見の教会に任命され、その後徳島へ移動して蜂須賀家政と足利義種の前で宣教します。1612年、司祭叙階のために有馬に呼ばれ、セミナリオで教えながら神学を勉強し、1614年に全国に発令されたキリシタン禁教令に伴い、高山右近とともにマニラへ追放されました。1615年、マニラで司祭に叙階されます。イエズス会の管区長はディオゴのことを次のように記しています。「ディオゴ神父、日本人、実直、仕事熱心で日本人の間で効果をあげ、感化を与えた。数日前に日本に帰国」。

1616年、密かに長崎に戻り、ミカエル草庵とともに京都に派遣されました。京都、大坂を拠点に、毎年のように五畿内、四国、江戸、また遠くは津軽まで追放され

大坂の殉教者（1人）大阪教区

殉教者名	殉教年月日	殉教地	年齢
ディオゴ結城了雪	1636.2.25	大坂	62

1636年、四国の山中で捕らえられ、大坂へ護送されました。処刑立会人の証言によれば、「結城神父は取り調べのとき、自分には宿主もなく、山野から採ったもので飢えをしのいできたと、衰えてはいても毅然として話を彼を見て、役人たちは結城神父を信じた。したがって、だれにも迷惑をかけずに一人で処刑された」と。

1636年2月25日、穴吊りの刑で生涯を閉じました。62歳同宿のミカエル草庵も彼の傍らで生涯を閉じていきます。

ていた信者たちを訪問しました。1619年10月6日に起こった京都の大殉教の時には、ベント・フェルナンデス神父やミカエル草庵とともに信者を支え、殉教者たちの遺体を埋葬しました。とても厳しい状況にある京都であちこち移動しながら宣教します。1633年、ベント神父も捕らえられ、長崎の西坂で生涯を終えました。最後、五畿内の司祭はディオゴ神父1人となります。それでも彼は衰えることなく、熱心に宣教活動を行います。困っている家庭があれば、命がけでそこを訪れて励ます司牧者。

忠実さを生きる修道司祭 西坂の殉教者・ジュリアン中浦



取材協力
平林 冬樹 神父
(イエズス会)

ジュリアン中浦の人生には、素朴さや謙虚さが見えてきます。修道会の目上から期待されたり、重要視されたりすることはありませんでしたが、忠実さに生きる一人の司祭でした。

ジュリアンは1567年ごろ、西海市の中浦に生まれます。2歳の時に父が亡くなり、母の祈りによって支えられ、育てられます。母はジュリアンがセナリオへ行くよりも立派な侍になってほしいと望んでいました。しかし、母の望みとは異なって、彼は12歳の時、司祭を目指して有馬のセナリオへ第一期生として入学します。

彼はとても病弱で、成績もけつして優秀な方ではありませんでしたが、四人の天正遣欧使節の一人に選ばれます。長い旅の後、ローマに到着し、第一目的であるローマに着いたあと、三日熱にかかってしまいました。謁見の日も熱はひきません。しかし、どうしてもあきらめきれず、馬に乗せてもらいますが、フラフラして落馬。仕方なく欠席します。少年四人で教皇に謁見したかったのですが、結局三人だけになってしまいます。当時83歳だった教皇グレゴリオ13世は、ジュリアンのことをかわいそうに思い、1週間後、病気が回復したジュリアンと三人の少年たちを再度謁見に招きます。教皇はジュリアンを抱擁し、ジュリアンにとってはこの上ない大きな喜びとなりました。

ました。それから約1週間後、教皇が亡くなります。教皇の葬儀、教皇選出のコンクラーベ、新しいシスト5世教皇の誕生、その戴冠式。まさに彼は時の人となりました。1591年に帰国し、豊臣秀吉から聚楽第に招かれ「ぜひとむわしに仕えないか」と言われます。当時の権力者にそう言われたのですから、とても名誉なことですが、四人ともそれを断ります。その後、ジュリアンは天草でイエズス会に入会します。彼は一生懸命勉強しますが、2回ほどラテン語の試験が不合格となりました。そんな中、1601年にセナリオの同級生三人が長崎で司祭に叙階されます。他の仲間たちが叙階されていく中、ジュリアンは落伍者のような心境でコレジオ生として過ごしたことでしよう。有馬、京都、博多などで教会の手伝いを命じられます。他の仲間から遅れること7年。1608年にやっと長崎で司祭に叙階されました。

司祭になってからは寝る暇もなかったと言います。迫害下の教会ですから、人の目を忍びながら走り回る。司祭が足りないし、昼間は潜伏し、夜の間に司牧する。まさに司牧者のモデルです。彼の活動範囲は、天草、八代、柳川、小倉など。さらに彼は、転んでしまった司祭たちも訪問しています。例えば千々石ミゲルのところを訪問しています。ミゲルが何をどう言っただか分かりま



ジュリアン中浦（島原教会）／本田利光作

せんが、小説にもなっています。

彼の秀でていたところは、平凡でも忠実に生きたことです。成績の面では優れず、むしろ試験では落第しましたが、それでも自分を与え尽くす人でした。「自分は選ばれてローマまで少年使節として行った」などと、自分の名譽を誇張するようなことはありませんでした。

今の時代は、人に目立つとか、文才があるとか、説教が上手だとか、黙想指導をしてよい話をするとか…。どちらかというと、能力のある司祭がもてはやされたりしますが、ジュリアンの場合はまったく逆のケースです。人柄もありますが、徹底的に、そして命がけで奉仕をしました。

西坂の殉教者（1人）長崎教区

殉教者名	殉教年月日	殉教地	年齢
ジュリアン中浦	1633.10.21	西坂	64

1632年、小倉で捕らえられ、長崎の牢屋に入れられ、棄教を迫られます。その責め苦は約10か月続きました。1633年10月18日、西坂の刑場に連行され、10月21日、「この大きな苦しみを神の愛のため」との言葉を残して、神のみもとに召されていきました。64歳。

キリシタン時代は司祭がだんだん少なくなっていきました。司祭の存在は、ゆるしの秘跡、聖体の秘跡のためです。そのため命がけで、司祭としての任務を果たしていく。彼の気概が感じられます。

その当時「司祭になりたい」というのは、人から尊敬されることが、名譽というより、むしろ、世間からは怪しい地下教団の指導者のように思われていました。毎日命がけで歩き回ります。キリシタン時代、自分がずっと隠れていて、信者が来るのを待っているような姿勢ではありません。命の危険を犯してでも家庭を訪問する。そういう状況を知り、覚悟の上で司祭を目指すし、司祭として働いていく。その情熱は時代を超えているのではないのでしょうか。